

## 子どもを守ろう予防接種

水痘（水ぼうそう）は、ほとんどの子ども(95%以上)がかかる病気です。数日間の発熱と体全体に発疹（水疱など）が出現します。発疹はかゆく、子どもは不機嫌になります。合併症でこわいのは、水疱に細菌が感染すること（劇症型溶血性連鎖球菌感染症）です。頻度はまれですが、この病気を合併すると極めて予後不良です。

水痘に子どもの頃にかからないと大人になってからかかります。おとながかかると、高い熱が7日間続き、肺炎を合併する危険性が高まります（子どもより重たくなる）。

水痘にかかると、水疱が黒ずんでくる（痂皮）まで園を休まなければなりません。通常は7日間です。水痘に効く薬を飲んでも5日間は休まなければなりません。

水痘ワクチンは、1回の接種ですと30%~50%の子どもがその後に水痘にかかりますが、多くは軽症で、発症しても水疱を作らないことがあります。新しい発疹が出なくなれば通園は可能です。2、3日の休園で回復します。ワクチン後の水痘発症を予防するために、水痘ワクチンは半年から1年の間に2回接種することが勧められています。水痘ワクチンの大きな副反応はありません（平成26年秋から定期接種となり、2回接種）。

おたふくかぜもほとんどの子どもがかかる病気ですが、耳下腺が腫れる症状を認めるのは70%です。耳下腺の腫脹は5日間~7日間持続します。おたふくかぜの代表的な合併症として、無菌性髄膜炎と難聴があります。

無菌性髄膜炎を合併する割合は3%~10%、難聴を合併する割合は0.1%~0.25%です。無菌性髄膜炎は自然に治る病気ですが、難聴は治らない病気です。日本では年間1,000人~2,000人がおたふくかぜによる難聴を発症しています。

思春期や成人がおたふくかぜにかかると、髄膜炎や難聴をおこす頻度が高まります（子どもより重たくなる）。男性では精巣炎を合併します。精巣炎を合併しますと、その後精子の数は減少します。

おたふくかぜでは、元気になり、耳下腺が小さくなりかければ通園できます。保育園児も幼稚園児も休む期間は5日くらいです。小学生ではもう少し長くなります。

おたふくかぜワクチンの有効率は85%~90%と、効果の高いワクチンです。おたふくかぜワクチンの合併症として無菌性髄膜炎がありますが、年齢が小さい子どもでは1/20,000接種(0.005%)以下です。ワクチンによる無菌性髄膜炎も自然に治る予後の良い病気です。ワクチンによる難聴は極めてまれです。

自然にかかる方がいいか、ワクチンを受ける方がいいかは、自然にかかった時の重さと、ワクチンの副反応の発症頻度と重さの比較から始まります。

